

# 甲南病院瓦版

## コロナワクチン副反応の話



血液内科・消化器内科

瀬川 秀和 医師

2020年1月に日本で最初のSARS-CoV-2感染者が同定されてから、1年半が経過しました。現在もCOVID-19が世界中で蔓延するなか、国内でも感染者数の増加とワクチンに関するニュースが毎日のように報道されています。

コロナワクチンの副反応については、他のワクチンと異なり歴史が浅く未だ不明なことも多いため、不安が大きいのは当然のことです。SNSなどでは「ワクチンが原因で死亡した」として拡散されることがあり、厚生労働省はウェブサイトで「接種後の死亡」と「接種を原因とする死亡」はまったく意味が異なり、誤った情報に注意するよう呼びかけています。

今回は、血液内科領域で取り上げられているワクチンについてのお話です。

血液疾患で治療中の方には、血小板数が10万以下の方が少なくありません。イギリスの専門雑誌に掲載された論文(Kuter DJ. Br J Haematol. 2021 Jun)によりますと、特発性血小板減少性紫斑病(ITP)患者にワクチン接種を行い、52例の患者のうち6例で出血症状を伴う血小板減少が観察されたと報告されています。著者らはITP患者では、ワクチン接種前後3-7日目の血小板値の測定を推奨しています。この報告を受けて、日本血液学会は「ITP患者におけるワクチン接種後の血小板減少の機序は明らかでなく、接種後1週間以内の早期血小板減少の有無に注意が必要」とコメントし、すべての血液内科医は信頼に足る情報を最大限に収集し活用して、診療にあたる必要があるとしています。ワクチンの有用性に関しては、ここで触れる必要もないかと思えます。

日常診療において今後ワクチン接種がすすめられていくにあたり、ワクチン接種との関連を念頭におくことが重要であると感じております。

2021年9月6日記